

<県研究主題>

望ましい集団活動を通して、一人ひとりの自主的、実践的な態度の育成と
豊かな人間関係をはぐくむ指導の充実と、評価の工夫・改善

提案 1

提案者 菅原 良子（相模原地区）

<研究主題>

豊かな人間関係をはぐくむ学級活動の実践
～人間関係作りのためのスキルを学ぶ～

1 提案内容

中学校学習指導要領、特別活動の学級活動の目標である「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」ことを意図し、人間関係づくりに必要なコミュニケーションスキルを身につけさせることを重点においた以下の3つのエンカウンターが発表された。

(1) 実践報告

①「Message Tree」

[ねらい]授業や係活動で一緒に過ごしてきた仲間に感謝の気持ちや応援などを伝えることにより、お互いに自己肯定感や自己有用感を持たせる。

[実施内容]同じ班のメンバー1人ひとりに感謝の気持ちや応援など肯定的なメッセージ(付箋)を渡し、教室に掲示する。

[実施期間]6週間に1度、席替えの前の週、帰りの会内に実施し、年間を通して行う。

②「友達付き合いのワザを磨こう！」

[ねらい]自己主張スキル「アサーション」を理解し、相手の意見を受け止めながらも、自分の意見も伝えようとする態度を育てる。

[実施内容]自己主張のタイプ3つ(攻撃型、非主張型、アサーション)に分類し、ペアでロールプレイングのエクササイズを行う。

③「みんなでそれ正解！」

[ねらい]問題に対して自分の考えを分かりやすく伝えることができ、級友(相手)の考えを聴き、理解を示すことができる態度を育てる。

筋道立てた話し合い活動の中で、1つの答えを導き出すために協力する態度を育てる。

[実施内容]教員の示すお題に対して、個人で考えたものを班員と話し合い、班で1つの「正解」を考え出す。

*お題例「さ」で始まる人から言われて嬉しい言葉は？

(2) 成果と課題

- 成果
- ・グループ(男女)の垣根を越えて交流し、協力する姿が多くみられるようになった。
 - ・回を重ねるごとに、自分の思いを伝えることに抵抗がなくなり、仲間の良い所などを探せるようになった。
 - ・生徒がアサーションを意識するようになり、言葉に気をつける場面が見受けられた。
 - ・最初は消極的だった生徒も自分の意見を堂々と言えるようになった。
 - ・学期始まりと年度末にYP(横浜プログラム)個人アセスメントを行ったところ、3学期には「学級居心地感」「仲間づくり」「自分づくり」の全体平均値が上がった。

- 課題
- ・社会生活におけるコミュニケーションスキルの重要性をより一層理解させること。
 - ・日常のあらゆる場面でTPOに応じた言動がとれるように指導をし、学んだコミュニケーションスキルを実践の場で生かせるようにすること。

2 協議内容

《質疑》

- ・Q:年間計画は年度の初めにきちんと出され、計画的に進めることは出来ているのか？
A:年間計画の予定通りにいかないこともあるが、学年内で調整して進めている。
- ・Q:エンカウンターを行う教員によって、取り組みの差がでるのではないか？
A:授業の前に共通の指導案は配布してあるが、担任の持ち味やクラスの雰囲気によって、取り組みによる差がでることはある。
- ・Q:3年間の中で教員が入れ替わった時は、どのように工夫して指導を行っているか？
A:年度初めの学年会で、決定したことを踏襲し、教員間で連携を図り実践している。
- ・Q:学年の問題点やいじめ等の深刻な話題などにおいても、身に付けたスキルが生きているか？
A:生徒間の垣根は取り外すことができたとは思いますが、実際に身に付けたスキルをまだ生かしてきてないと思う。
- ・Q:メッセージツリー以外のエンカウンターも、年間を通じて計画的に行なっているのか？
A:多くのエンカウンターは単発で行っている。

《各校での取り組みの紹介》

- ・今日のMVP 一日の活動の中で活躍していた生徒の発表
- ・年に1度「いい所さがし」という形式でメッセージを書き、台紙に貼るという企画
- ・教育相談（夏休み明けにアンケートを実施し、放課後4日間、担任が全生徒と面談）

3 まとめ

指導・助言

人間関係づくりに関しては、発達段階に応じてコミュニケーションスキルを身に付けることが重要である。ソーシャルスキルトレーニングは実施することが大切なのではなく、そこで身に付けたスキルをその後の生活につなげ、自主的・実践的な態度が育ってこそ、学級活動の目標が達成される。すぐに改善がみられなくても、継続して指導を行ない生徒の変容を見取ることが大切である。また小学校での実践や取り組みに関する情報交換をするなど系統的な指導をすることや、年間計画を見直し、教員が効果的な指導や評価の工夫をしていく必要がある。

<研究主題>

地域と連携した学校行事の在り方・進め方

1 提案内容

(1) 実践報告

①目的

現在の中学生の周りにいる大人は、家族と学校関係の教職員が中心。（関わる大人が少ない）
→地域のNPO・社会福祉法人・自治会等と連携した学校行事を行う。（南郷中FGC活動）
＝気持ちにゆとりのある大人や地域力により子どもたちを支え、子どもたちが積極的に地域づくりに参画していく自主的・実践的態度を育てることを目的とする。

②具体的な活動（必要な時間数）

ア 葉山まるごとウォッチング（1年次：4コマ＋α→概要説明・当日・まとめ）

地域の方のガイドにより、半日かけて学校の校区内を歩き自然・歴史・地理等を学ぶ。

イ 葉山まちづくり展見学（1年次：3コマ）

2年次のFGC体験学習に備え、どんな体験ができるのか実際に見聞きしイメージを持つ。

ウ 地域ふれあいの会（1年次：8コマ→OT・班会議・当日・まとめ・礼状・ふりかえり）

自分が住んでいる地域の方々からお話を聞き、地域の良さや課題を考える。

エ FGC体験学習＋発表会（2年次：12コマ→団体説明・事前顔合わせ・当日・発表練習）

グループで、葉山ならではの体験をし、葉山の魅力を実感するとともに地域の方々との交流を通して、様々な考え方や生き方を学ぶ。

オ 地域ボランティア活動（3年次）

3年間お世話になった地域の方々に、お礼の意味を込め清掃活動を行う。

(2) 成果と課題

①成果

ア NPO等の方に広く認知され、熱心に取り組んでいただいている。（間接的な地域貢献）

イ 様々な体験学習やふれあいを通して、世代を超えた方々との交流ができ、心豊かな人間の形成に寄与できており、学習指導要領の学校行事の目標にも合っている。

ウ 自分たちが住む葉山というまちの魅力を実感し、「将来、よき地域人」として葉山に根付く人間の形成に寄与できている。

②課題

ア 「他の行事との関わり」および「時間の捻出」

活動時期が1学期に集中する。生徒総会・体育祭・試験・修学旅行・部活動の大会等とも重なり、教員も生徒も忙しい。関係団体が多いため、時期をずらすことが容易ではない。
→特設学活で時間を捻出するが、そうすると時間割を動かしているため、週に1度も学活がない週が出てきたり、裁量の時間がなくなったりする。＝内容の精選の必要

イ 内容が固定化されマンネリ感あり。教員側の目的意識が薄れ、活動の意義を見失いがち。

ウ 評価について非常にあいまいな点が多い。

→成果を数値化する事柄ではないと考えているので、FGC活動の意義をはっきりさせつつ、方向性を今後も議論しながら進めたい。

2 協議内容（質疑応答）

（1）総合的な学習の時間や他教科との関連性について

→学活と総合の時間を使って、時間を捻出しているが、その内容についてはあまり明確に区別されていない。意図的ではないが、例えば国語の授業の中で学んだことが、礼状書きのところで生きているなどの実感はある。

（2）活動を行うにあたって事前準備はどのようなことに重点を置いているか。

→電話の対応の仕方や礼状の書き方等の基本的な指導をしている。

（3）異学年間での連携はあるのか。（3年から2年へ 2年から1年へ等）

→今のところ行っていない。口コミなど自然発生的に上級生から下級生に情報が入っている。

（4）評価はどのように行っているのか。要録の「学校行事」の欄の○の付け方。

→全員に○はつけない。担任が見ていて顕著な者のみにつけることとしている。

（5）総合的な学習の時間の内容に近い印象を受ける。話し合い活動等はどのような場面で行っているのか。

→ワークシート等を活用し、活動をする上での約束事や目標を設定させる際に行っている。

3 まとめ

南郷中の活動は有意義なものであり、特別活動の学校行事の目標にあっているものである。誰が担当しても負担になることがないように内容を精選して、この活動を継続していくことが地域に住む子どもたちの育成につながっていく。また、子どもたちの力をつけるために、指導と評価の一体化についての話があり、特別活動においても、教科と同じく必要不可欠な考え方である。

■グループ協議「特別活動の諸課題への取組」

学級活動（人間関係づくり）と学校行事（地域連携）という2本の発表を受けて、各グループで協議が行われた。主には各学校での情報交換が話の中心であった。

全校体制で行っている人間関係づくりや地域連携の例を挙げていた。人間関係づくりでは、「いとこさがし」などの活動を行事終了後等に行っている学校も多かった。また、地域連携としては、小中連携・中高連携・職場体験等の話題になっているグループが多かった。

また、特別活動のための時間の確保や、評価の仕方について議論を行っているグループもあった。

■部会のまとめ

文部科学省から出された特別活動 中学校編の内容を中心に助言があった。

その中で特別活動の目標と総合的な学習の時間の目標との違いについて触れられ、特別活動の目標を達成するために、話し合い活動が欠かせないことの話があった。（地域の人話を聞き、生き方を学ぶ、だけでは総合的な学習の時間の範疇に入る）

特別活動の年間計画を作成する中で、いつ・どの場面で・どんな話し合い活動を取り入れるか等を設定することが必要で、ひいては評価もしやすくなるのではないかという話でまとめられた。